研究ノート

領域「環境」の専門的事項の指導の在り方に関する一考察

～ 学生の領域「環境」に対する意識調査から ～

Consideration on a method of teaching concern field of the “Environment”
：College student awareness survey about field of “Environment”

助川　公継

Key words ；　教育課程、資質・能力、領域「環境」、幼児期の終わりまで育ってほしい姿

1. はじめに

教育課程の質的水準に寄与するコアカリキュラムの作成については、平成 13 年の「国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する報告会」の報告から、平成 27 年の「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」（中教審答申）での「学び続ける教員を支えるキャリアシステムの構築のための体制整備」の中の「国が大綱的に教員育成指標の策定指針を提示、教職課程コアカリキュラムを関係者が共同で作成」を受け検討され、策定に至ったものである。[1] 幼稚園教諭養成課程においても、教職に関する科目の再編成がなされるとともに、これまで「教科の専門」であった箇所が「領域の専門」へと大きく変わった。科目内容の再吟味とともに科目構成やシラバス作成にも大きく関わってくる。

本稿では、領域「環境」の専門的事項に関わる授業実践を通して、指導上留意すべき事項について洗い出すとともに、今後の指導の在り方について検討したものである。

2. 幼稚園教育要領等の改訂に伴う幼児教育の方向性

○　幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂

中教審教育課程部会答申（平成 28 年 12 月）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」を受け、平成 29 年 3 月に新しい学習指導要領等が告示された。それに伴い教育職員免許法と教育職員免許法施行規則の改正がなされ、新しい教職課程が実施されている。特に、幼稚園教諭養成課程においては、科目区分の大括り化と履修内容の充実が図られるとともに、「領域及び保育内容の指導法に関する科目」が創設された。[2]

「領域及び保育内容の指導法に関する科目」では、領域論と指導法から構成され、幼稚園教諭に求められる資質能力を、５領域に示す教育内容に関する専門知識を備えた専門性と、５領域に示す教育内容を指導するために必要な力、具体的には、幼児を理解する力や指導計画を構想し実践していく力、様々な教材を必要に応じて工夫する力等の実践力の二つの側面から見ていくことになった。

さらに今回の改訂では、幼稚園教育要領を例にとってみると、次の三点が上げられる。[3]

①幼稚園教育において育みたい資質・能力の明確化

・幼稚園教育において育みたい資質・能力として、「知識及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の三つを示し、「ねらい及び内容」に基づく

活動全体によって育むことを示した。

②小学校教育との円滑な接続

・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、(「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」) を明確にし、小学校の教師と共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るように努める。

③現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直し

・現代的な課題を踏まえた教育内容の見直しを図るとともに、教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動や子育て支援の充実を図った。

また、上記の三点については、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領ともに整合性が図られ、就学前教育の核となっている。資質能力の三本柱については、小学校、中学校、高等学校まで貫かれ、より一層学校段階間での育ちと学びの連続性が重視されることとなった。

3.「環境を通して行う教育」における「環境」と領域「環境」に関して

幼児教育の特徴として「環境を通して行う教育」と「遊びを通しての総合的な指導」が上げられる。「環境を通して行う教育」について、幼稚園教育要領解説では、「教育内容に基づいた計画的な環境をつくり出し、幼児期の教育における見方・考え方を十分に生かしながら、その環境に関わって幼児が主体性を十分に発揮して展開する生活を通して、望ましい方向に向かって幼児の発達を促すようにすること、すなわち『環境を通して行う教育』が基本となるのである。」と述べられている。つまり、子どもの発達を助長することや、援助するために大人の指示や指導だけで成立するものではなく、子ども自らが主体となって環境に関わる力を大切にすることが求められている。

1989 年の「幼稚園教育要領」改訂に際して、松島は「保育の環境は、保育者が子どもに一方的に与えるものではなく、予め用意するだけの固定的なものでもないと説かれ、保育者にはそのことの理解と、発想の転換が求められた。すなわち、環境には人的環境も重要であり、『環境そのものを子どもと一緒につくっていく、子どもたちがつくっていく』ことや、『それぞれが動き出すことで環境も変化していく。その動きがあって保育という営みになる』という認識が必要とされた。こうした意図が『環境を通して』という標記に込められていたと考えられる。」と述べている。[3)] まさに、子どもを取り巻く、保育者や子ども自身を含む人的環境、物的環境、事物・事象等との動的でダイナミックなものと捉えることができる。

また、「遊びを通しての総合的な指導」については、現行の幼稚園教育要領解説では、「幼児の遊びは、遊ぶこと自体が目的であり、人の役に立つ何らかの成果を生み出すことが目的ではない。しかし、幼児の成長や発達にとって重要な体験が多く含まれている。」と書かれている。さらに、総合的な指導に関しては、「幼児期には諸能力が個別に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達していくのである。」と述べている。つまり幼児にとって、環境と関わりながら、遊びを通して諸能力が総合的に発達していくことを意味しており、領域「環境」は、どのような活動を通して何を学んでいくかという活動内容や体験する対象として取り上げられている。

以上のことから、「環境を通して行われる教育」の「環境」は、子どもを取り巻くすべての身近で

動的な環境の中で成長していくという教育方法的な意味合いが強く、領域「環境」については、「遊びを通しての総合的な指導」との関連からどのような経験をすることが大切かという、主として経験内容を示していると言える。

４．領域「環境」について

(1) ねらい及び内容

学校教育法の第三章幼稚園の、第23条（幼稚園教育の目標）には、５領域の基本となるねらいが示されている。領域「環境」に関わる項目としては「三　身近な社会生活、生命及び自然に対する興味を養い、それらに対する正しい理解と態度及び思考力の芽生えを養うこと」になる。

それを受け、幼稚園教育要領の第２章のねらい及び内容には、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」が示され、具体的なねらいとして、以下の三点が述べられている。[5)]

(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
(2) 身近な環境に自ら関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
(3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

これらは、前述の育みたい資質・能力である「知識及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」にそれぞれ対応し、育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えた形で記述され、12項目の内容はねらい達成のための指導事項となった。

今回の改訂では、内容の(6)「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」が加わり、(8)「身近な物や遊具に興味を持って関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら、試したり工夫して遊ぶ」では、下線部が新たに付け加えられた。（下線は、筆者が付与）

（１）自然に触れて生活し，その大きさ，美しさ，不思議さなどに気付く。
（２）生活の中で，様々な物に触れ，その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
（３）季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
（４）自然などの身近な事象に関心をもち，取り入れて遊ぶ。
（５）身近な動植物に親しみをもって接し，生命の尊さに気付き，いたわったり，大切にしたりする。
（６）日常生活の中で，我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。
（７）身近な物を大切にする。
（８）身近な物や遊具に興味をもって関わり，自分なりに比べたり，関連付けたりしながら考えたり，試したりして工夫して遊ぶ。
（９）日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
(10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
(11) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。
(12) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

教師は、(1)～(12)の内容に関して園内外にある様々なもの等に対して、それらを意図的、計画的に構成することが大切になってくる。幼児はこれらの環境に好奇心や探究心をもって主体的に関わり、自分の遊びや生活に取り入れていくことを通して発達していくことになる。

(2) 領域「環境」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

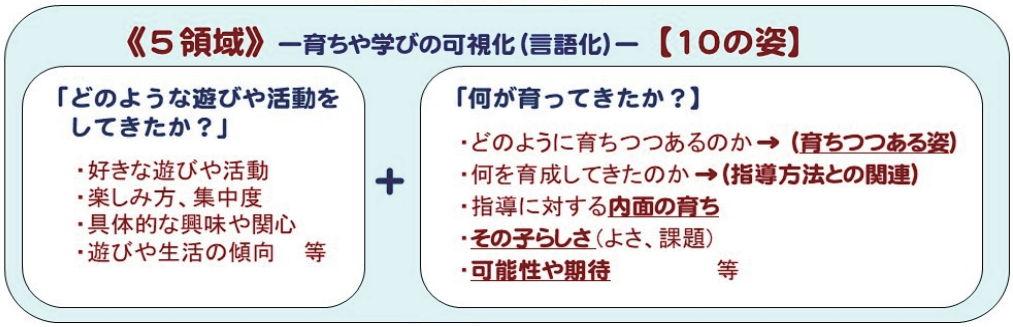
領域のねらい及び内容に基づく活動全体を通して育みたい資質・能力はより一層明確になり、幼稚園修了時の具体的な姿（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」以下、10 の姿）につながる。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、10 項目と具体的な姿として記述されている。

特に、領域「環境」においては、10 の姿のうち、次の 3 項目が関係してくる。

【領域「環境」と関連する幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】[3)]を参考に筆者作成

活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿	
思考力の芽生え	・身近な環境に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになること ・友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになること
自然との関わり・生命尊重	・自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになること ・身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになること
数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	・遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれを活用し、興味や関心、感覚をもつようになること

教師としては、（5 領域の中で）どのような遊びや活動を通して、何が育ってきたかを見取ることが大切になってくる。以下は、5 領域と 10 の姿の関係を表したものである。



（筆者作成）

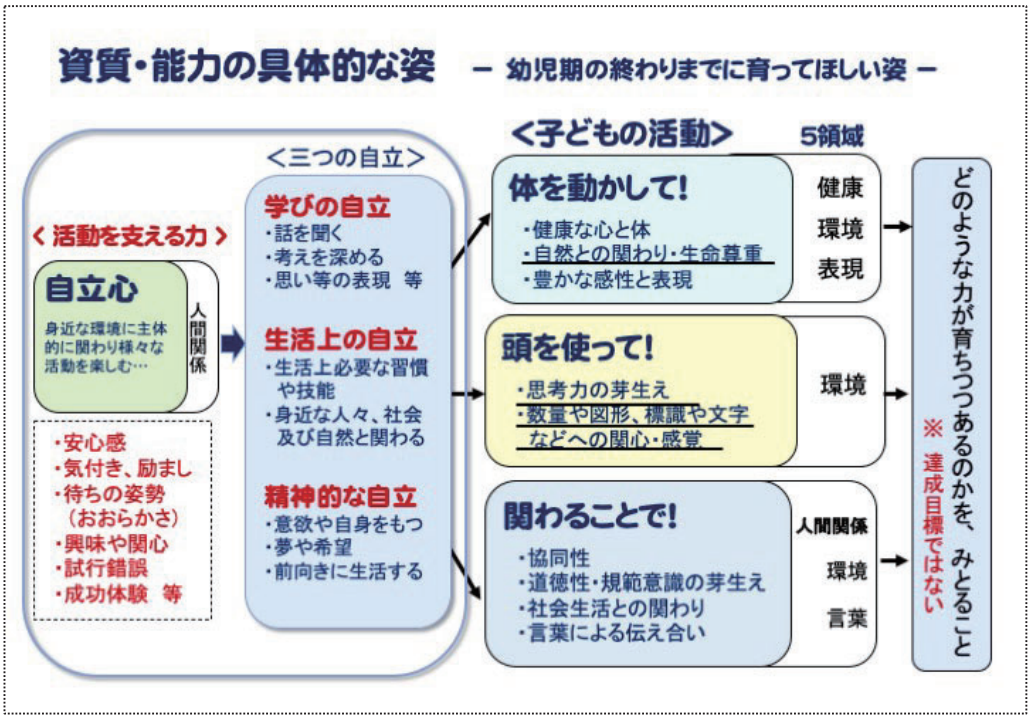
前述の「環境」の内容は、子どもの発達の側面から示されたものであり、さらに発達はさまざまな側面が絡み合い、相互に影響を与えながらなされるものであることから、以下のプロセスの中で十分に育んでいくことが大切になってくる。

○ 物事について気付き、自分なりに考える過程で

○ 自然と出会う経験のなかで
○ 出来事を人々と共有する過程で
○ 数量や文字との関わりのなかで

これまで述べてきたことを関連付けると、領域の「ねらい・内容」は、子どもの活動を通して育まれていき、方向目標としての「10の姿」へとつながっていく。注意しなければならないのは、あくまで方向目標であり、達成目標ではないことである。

この関係を図に表すと次のようになる。子どもの様々な活動の中に 10 の姿が現れてくることになる。(図の下線部は、主として10の姿につながる「環境」の項目を示している。)



[3]を参考に筆者作成

5. 領域「環境」に関する学生の意識調査から

今回、本学の保育科２年の学生86名に対して領域「環境」に関する意識調査を実施した。調査内容として主として以下の３点を取り上げた。質問の内容は、「①『子どもにとっての身近な環境』を取り上げるとき、優先したい順に番号をつけなさい」、「②子どもが周囲の環境と関わるために大切にしたいことは何ですか。あなたが優先したい順に番号をつけなさい」、「③領域「環境」について、あなたがもっているイメージはどのようなものですか、自由に書いてください。」とした。

(1) 調査時期及び人数

・令和２年１月 28 日，保育科（２学年）86名

(2) 調査内容（いずれも質問紙による調査）

①と②については、選択肢への数値による順位付けによるＦＡ(フリーアンサー)形式で行い、③のイメージについては自由記述とした。

①の集計では、環境の内容の中から 10 項目を選び、優先順位の１～３を上位、８～10 を下位グループとして単純集計したものと、さらに重み付け加算をして総合評点を求め、各スコアの合計が 100 になるように集計した。②の集計では、7 項目を設定し①と同様に上位グループと下位グループを単純集計するとともに、重み付け加算によるスコアも算出し整理した。

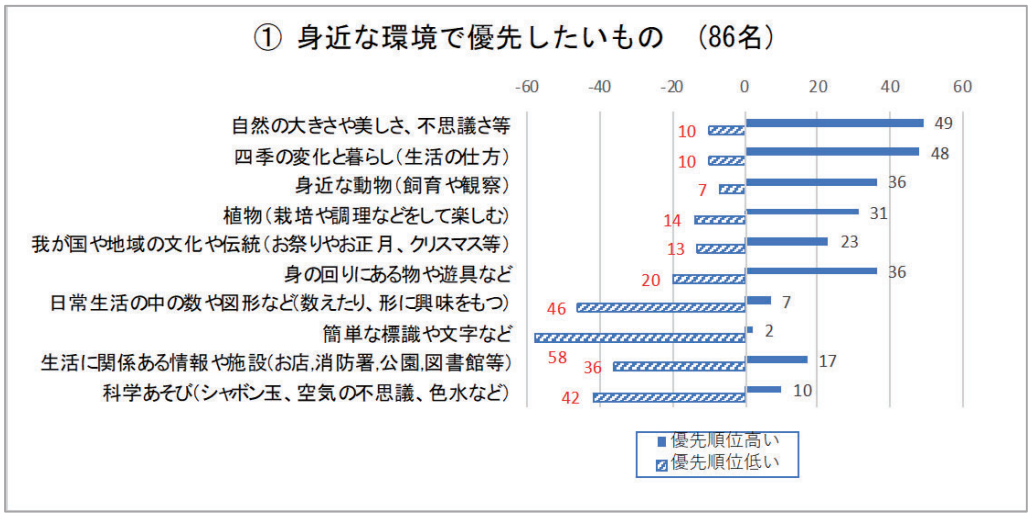
(3) 集計結果と考察

ア. 「子どもにとっての身近な環境」を取り上げるとき、優先したい順に番号をつけなさい。

〈各項目ごとの集計結果(86 名の調査結果)〉

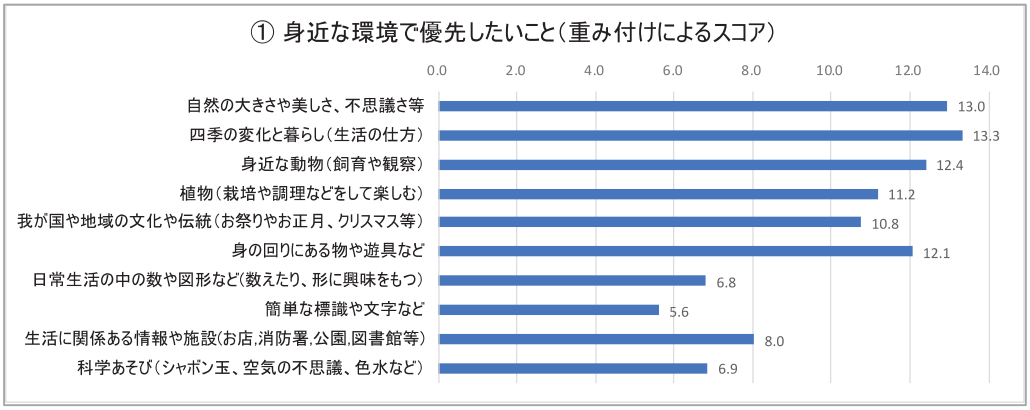
	優先順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ア	自然の大きさや美しさ、不思議さ等	25	7	17	8	4	7	8	2	4	4
イ	四季の変化と暮らし(生活の仕方)	21	17	10	12	3	10	3	7	1	2
ウ	身近な動物(飼育や観察)	7	16	13	14	14	12	3	3	3	1
エ	植物(栽培や調理などをして楽しむ)	3	9	19	10	12	12	7	9	5	0
オ	我が国や地域の文化や伝統(お祭りやお正月、クリスマス等)	3	12	8	11	19	13	7	3	5	5
カ	身の回りにある物や遊具など	24	10	2	11	9	7	3	12	4	4
キ	日常生活の中の数や図形など(数えたり、形に興味をもつ)	0	2	5	6	6	6	15	17	17	12
ク	簡単な標識や文字など	1	1	0	7	7	2	10	13	22	23
ケ	生活に関係ある情報や施設(お店,消防署,公園,図書館等)	1	5	11	2	7	9	15	13	15	8
コ	科学あそび(シャボン玉、空気の不思議、色水など)	2	7	1	5	5	9	15	6	10	26
サ	その他										

＜上位グループ(優先順位の１～３)と下位グループ(8～10)による単純集計＞



自然の美しさや不思議さ、四季の変化と暮らし、身近な動物の飼育や観察など、自然環境や生活環境に関わるものが上位を占めた。一方で、簡単な標識や文字、数や図形、科学遊びに関する項目では優先順位が低い傾向がある。

＜重み付けによるスコア（合計 100%）＞

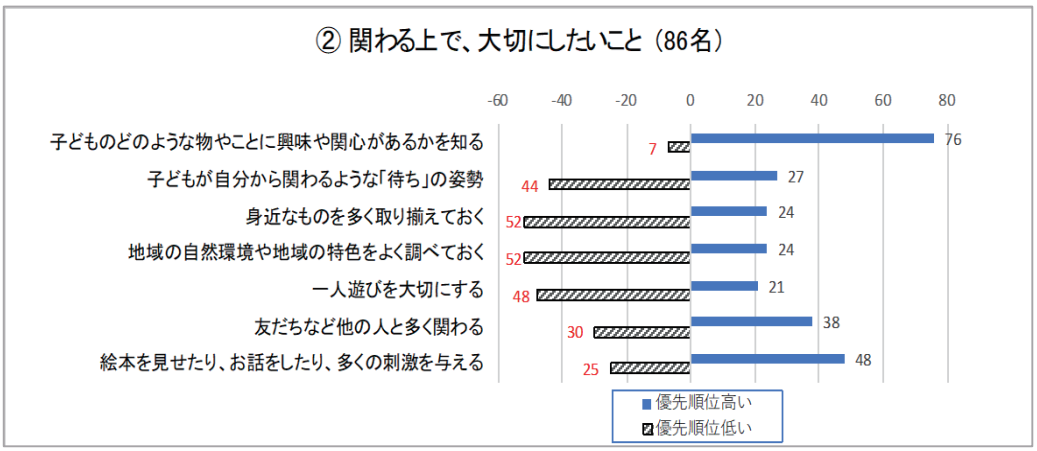


重み付けによるスコア結果も単純集計と同様の結果を示している。

イ．子どもが周囲の環境と関わるために大切にしたいことは何ですか。優先したい順に番号をつけてください。（86 名の調査結果）

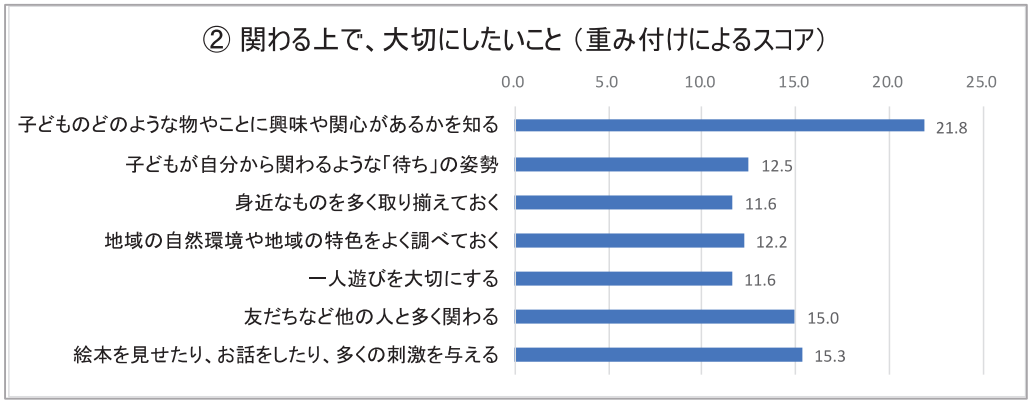
	優先順位	1	2	3	4	5	6	7
ア	子どものどのような物やことに興味や関心があるかを知る	50	18	8	3	2	4	1
イ	子どもが自分から関わるような「待ち」の姿勢	5	11	11	15	14	13	17
ウ	身近なものを多く取り揃えておく	4	10	10	10	15	20	17
エ	地域の自然環境や地域の特色をよく調べておく	7	11	6	10	21	15	16
オ	一人遊びを大切にする	4	4	13	17	12	22	14
カ	友だちなど他の人と多く関わる	9	13	16	18	15	7	8
キ	絵本を見せたり、お話をしたり、多くの刺激を与える	7	19	22	13	7	5	13
ク	その他							

＜上位グループ（優先順位の１～３）と下位グループ（5～7）による単純集計＞



大部分の学生が、まずは「子どもの興味や関心を大切にしたい」と考えていることが結果からうかがえる。「子どもが自分から関わるような「待ち」の姿勢」となると、優先順位が低くなっている。興味や関心のあることを把握した上で、それに沿った環境を子どもに与えようとする傾向にある。

＜重み付けによるスコア（合計 100%）＞



子どもの興味や関心を大切にするとともに、絵本や、お話など保育室内での活動の充実をあげている。一人遊びを大切にしたり、地域の自然環境や特色を生かしたりする面では低くなっている。

ウ. 領域「環境」について、あなたがもっているイメージはどのようなものですか、自由に書いてください。

記述内容を分類してみると概ね３つのカテゴリーに整理できる。「親しみ・感じる対象としての環境」、「試行錯誤など働きかける対象としての環境」、「日常生活の身近な対象としての環境」と分け、学生の抱いているイメージについて記述したものを、それぞれのカテゴリーにまとめると以下のようになった。

＜親しみ・感じる対象としての環境＞ → 触れること、感じること→ 気付きを重視
諸感覚を働かせ、自然に身を置く心地よさを体感させ、自然を感じる心を育てる

- 季節の植物を使っての製作、季節の植物やものに触れる（花、雪、土など）
- 花、草、地域、動物、植物、自然
- 自然とのふれあい
- 自然、虫、動物、植物
- 外で自然と触れ合う
- 身近なものとの触れ合いを通して、様々なものに興味関心を引き出す
- 身の周りの自然や園などで飼っている動物と触れ合う
- 自然をみて季節を感じたり、植物を使って作品をつくったこと
- 子どもを取り巻く自然の豊かさ、素晴らしさ
- 動物のお世話をする、野菜などを育て収穫する、花などを使った遊び
- 自然、生活、遊び
- 自然に触れて学んでいくイメージ
- 自然とふれあい体験を通して学ぶこと
- 四季、自然、植物、動物、遊具、保育者、子ども、保護者、文字、色、保育室、園庭、固定遊具
- 森などの自然環境、草花で遊ぶ
- 自然との触れ合い（草花や園庭にある植物など）
- 自然環境（木、花、生き物など）や保育するための保育環境（玩具、遊具、楽器など）のイメージ
- 身の回りのものや、自然のもの、動物、植物など、身近に触れられるもの
- 保育室の環境構成や園庭の環境（自然、動植物）だと思う。

＜試行錯誤など働きかける対象としての環境＞

→ 興味や関心のあることに存分に関わる→ 思考力・判断力・表現力の育成

子どもなりに何とか探ろう、理解しようと試したり、確かめたりして、自分なりに納得していくプロセスを大切にしたい。

・子どもにとって影響のあるとても大切なもの
・子どもに大きな影響を与える
・子どもの成長に大切なもの
・子どもが過ごしやすく、興味・関心をもつもの
・適切な環境があるために、子どもの遊びへの積極性や興味関心を引き出させるもの。
・安定した環境のもとで過ごすことで、自分の思いを安心して表現することができる
・子どもの一番大切なもの　　・人々がつくる場
・子どもの成長における大切な知識、学びの教材
・自然のことではなく、子どもたちの身近にあるもの
・子ども自らが興味をもつ
・子どもにとって必要なもの、将来役に立つもの
・子どもに必要不可欠なもの
・子どもの周りにあるものすべてが環境、友だち、先生、地域、遊具
・遊ぶ道具や季節の花、子どもが関心をものっているものを用意し構成すること
・子どもが成長していく上でもっとも大切なこと

＜日常生活の身近な対象としての環境＞→ 遊びに取り入れようとする新たな視点の発見→行動化

日常的にある身近なものを別の角度からみたり、考えたり、遊びの中へ取り入れたりしながら新たな使い方をするなど、よりよい生活を自らつくり出していく力を育てる。

・環境を整え、生活することが大切
・子どもが生活するところ
・５領域の中で、全部の領域（人間関係、健康、言葉、表現）に関わっている領域
・遊びや家、園生活
・子どもの周りの環境について人的・物的・社会的環境など
・子どもの周りにあるもの全て
・子どもが生活していく上で大切なことやもの
・子どもの育ちにとってよりよくしていかなければならないもの
・自然のほか、人やものなど子どもたちの周りを取り巻くもの
・自然のなかでの発見、知るという力を伸ばすもの
・自然との共存、学ぶことで大切なもの
・子どもにとって重要なもの
・子どもたちが遊べる場
・自然、保育者も子どもにとっては環境の一部、遊具
・子どもにとって過ごしやすい支援やかかわり
・様々なものに触れ、心を育てていくイメージ
・身近にあるもの、不思議

今回の調査と何人かの学生へのインタビューを通して、「環境」に関しては、授業の中での学びのほかに、教育実習、保育実習、施設実習での指導や実践から自分なりにイメージをつくりあげていることがわかった。部分実習や、総合実習（１日実習）でも絵本の読み聞かせやペープサート、エプロンシアター、手遊び、季節の歌、ダンスなどを取り上げる割合が非常に高いことからもうかがえる。また、本学を志願する学生の実態として、多くの学生が高校のときに得意科目として国語や体育を、不得意科目として数学や理科、外国語と答える割合が高かった。したがって、科学的な遊びや事象を取り上げ、興味や関心をもたせることに積極的でない傾向も見られる。学生の実態とし

て、これまでの学習経験や生活体験からみると「試行錯誤など働きかける対象としての環境」に関する記述が他のカテゴリーに比較して少なかったことがわかる。

こうした学生の生活体験等に起因するものとして、田川らは、「保育者の『虫嫌い』を緩和し、身近な昆虫を保育に活用する方法」[6)]の中で、保育者の虫嫌いには２つの問題があるとしている。「１つ目は、幼児が充実した体験を行う上でのサポートや環境づくりが困難になることである。２つ目は、保育者自身が昆虫を扱う際に強いストレスを感じると想定されることである。保育者志望の学生を対象とした調査によると、就職後、78%の学生が子どもたちと虫採りなどの昆虫とふれあう活動を『行う』あるいは『行うかも』と答えている。」と述べている。

子どもにとっては保育者は選べない。得手不得手や興味・関心の対象、経験の有無などで指導のバランスを欠くことのないよう、保育者自身の指導力の幅を広げたり、カリキュラムを工夫したり、チームとして取り組んだりするなどの配慮が必要になってくる。

子どもの発達状況に応じて、年間を通して内容項目をバランス良く実践していくには、保育者自身も「親しむ・感じる」や「試行錯誤」、「日常生活での新たな発見」等を意識して実践していく姿勢が求められる。今回の意識調査より本学の学生には、親しむ・味わう・感じる・触れるといった環境の捉え方がやや強い傾向にあることがわかった。「親しむ・感じる」から、それを取り入れ、考えたり、関わったりするような活動が展開できる力を育てていきたいと考えている。授業を核として、科目横断的に体系立てた取り組みを意識しておくことが肝要であろう。その過程で学生自身が試行錯誤し、考え、工夫するような体験ができることを期待したい。

６．これまでの指導について

領域「環境」の指導を通して、幼児を取り巻く環境の諸側面と幼児の発達におけるそれらの重要性については十分に理解していると考えられる。特に、幼児と環境との関わり方について専門的概念（能動性、好奇心、探究心、有能感等）を用いて説明できることを目指して授業を展開してきた。また、幼児期の思考・科学的概念の発達に関しては、生物・自然との関わりの事象に対する興味・関心、理解の発達は理解しているものの、まだ科学的な分野に関しては、これまでの自らの体験や興味・関心に依存する傾向が見られる。

学んだことを応用していく機会や、修得した知識や技能を実践の場で活用できるような取り組みとして、保育科の１年前期の同時期に展開される「マルチメディア演習」と「教育実習指導」との関連を図り、幼児と環境で学んだことを体験的に生かす目的で、子どもの学びに迫る取り組みをしてきた。具体的には、一つ一つの子どもの活動を単発で終わらせず、興味・関心を高めながら次の活動へつないでいくいわば、ストーリーとして仕上げていく内容となっている。図は、一連の流れを表したものである。

①は、隣接する附属幼稚園で、子どもたちが園外保育で採集物を入れるための採集箱づくりを行った。４歳児は牛乳パックを使い、５歳児はペットボトルを使って作成。②その後、学生と一緒に歩いて 15 分ほどの場所にある地元の公園へ向かう。途中には信号や横断歩道などもある。③現地に着くと、地元の公園を守る会のボランティアの方々が迎えてくれる。公園の様子などについて話を聞く。③学生が寄り添いながら、５歳児は、公園の池でザリガニ釣り、４歳児は植物採集に取り組む。⑤釣ったザリガニのようすを観察する。⑥持ち帰ったザリガニを観察しながら絵で表現する。⑥みんなで公園での活動を振り返る。ザリガニはどのようなところにいたのか、小川には、ほかにどんなものがあったか。話題は尽きない。⑦実際に、小川を作ろうということになり、様々なアイディアを出し合いながら小川を再現しようと夢中になる。⑧ザリガニも紙を丸めて立体的にした。

＜採集したものを説明＞

＜カマキリもつかめる！＞

＜小石にこだわる＞

園外保育への引率前には、事前踏査し現地の自然環境（地形や特徴、動植物の分布など）や安全・衛生面、公園を管理しているボランティアの方々からの説明、途中にある標識や畑の作物などの調査をし、その上で子どもとの関わり方について話し合った。

この授業では、一つの活動の中にも様々な要素が含まれていることを理解することができた。最終的には「マルチメディア演習」でのポートフォリオの作成まで関連させて取り組んだ。幼稚園教

育要領の改訂で示されている「主体的・対話的で深い学び」とは、「周囲の環境に興味や関心をもって積極的に働きかけたり、見通しをもって粘り強く取り組んだり、他との関わりを通して自らの考えを広げ深め、試行錯誤を繰り返しながら、生活を意味のあるものとして捉える」とあるが、今回のような授業は、そのイメージに相当するものと考えている。他の科目や分野などと連動させながらの総合的な取り組みは、非常に効果が高いと考える。

7．最後に

「幼児を取り巻く環境」、「身近な環境との関わりにおける思考・科学概念の発達」、そして「標識・文字等、情報・施設との関わりの発達」を中心にシラバスを構成して実践してきた。意識調査の結果から、学生自身のこれまでの学習経験や生活体験、興味・関心の対象、得手不得手などによって取り上げ方に差がでることがわかった。また、それは子どもへのアプローチの仕方にも大きく関わってくるという報告もあるし、実際に実習での指導面でも如実に現れている。将来、教育の現場に立ったときに、いかにバランスよく指導できるか、自らの指導の幅をどう広げていくか、今後は、その基盤となる教師自身の学び方まで触れる必要があると感じている。ICT の活用やアクティブラーニングといった方法的な面を含め、子どもたちの学びの連続性を大切にした指導ができるか、課題として考えていきたい。遊びから学びへと言われるが、小学校への接続は、このような指導の延長上に位置づけられていくはずである。

領域「環境」の指導に関しては、今回の意識調査や学生の実態（特に学習経験や生活体験等）を考慮しながら、工夫改善をしていきたい。また、他の科目や実習等との関連付けを意識した取り組みがさらに必要であると実感した。

参考文献

1）　文部科学省　中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について〜学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて〜」2015 年 12 月 21 日

2）　保育教諭養成課程研究会「幼稚園教諭養成課程をどう構成するか〜モデルカリキュラムに基づく提案〜」萌文書林、9-13 頁

3）　文部科学省「幼稚園教育要領解説」2018 年 3 月、4 頁

4）　松島のり子「保育の環境と領域「環境」の関係に関する一考察」、『人間発達研究』第 31 号、お茶の水女子大学人間発達研究会、2016 年 12 月、9 頁、11 頁

5）　文部科学省「幼稚園教育要領」、2017 年 3 月

6）　田川一希「保育の領域『環境』において、保育者の『虫嫌い』を緩和し、身近な昆虫を保育に活用する方法」、中村学園大学発達支援センター研究紀要　第 9 号、69 頁